

～大腿骨近位部骨折には早期に適切な治療が大事～

整形外科 みしましんたろう 三嶋信太郎

超高齢社会を迎えた今、自分らしい毎日を元気に送られているアクティブシニアとよばれる方々が増えています。

しかし、どんなに元気な高齢者であっても、つまづいたり、人にぶつかったりした拍子にバランスを崩して転倒し、骨折することがあります。

特に転んで尻餅をついてしまったような場合に多いのが大腿骨近位部骨折で、患者数は毎年20万人以上にのぼると報告されています。

大腿骨近位部というのは、人間の骨の中で一番大きい大腿骨のうち、脚の付け根に近く、内側にくの字に曲がった部分を指します。曲がった部分の先端は骨頭と呼ばれる球状の突起となっていて、それが骨盤の丸いくぼみと組み合わさって股関節を構成しています。

転んだ際、曲がった部分には力が集中することに加え、高齢者の場合には、骨そしょう症で骨自体が脆くなっていることも、大腿骨近位部骨折が多い原因です。

骨折した場合には脚の付け根が痛み、立つことも歩くことも難しくなります。治療ができない場合には、寝たきりや車椅子での移動がやっとといった状態になってしまいますが、高齢者の場合には、短期間で身体が衰弱してしまうばかりか、肺炎などを併発して生命の危機に陥ることも稀ではありません。

ですから、一刻も早く手術を行い、リハビリを開始することが何よりも大切です。欧米では24時間以内の手術が推奨されている程ですが、我が国の医療体制ではそこまでの対応は難しいのが実情です。現在当院では、平日の午後であればいつでも手術ができる体制を整えていますので、ほとんどの場合、3日以内に手術を行っています。速やかに手術を行うことは、合併症リスクの低減にもつながります。

大腿骨近位部骨折のうち、骨頭に近い部分が折れた場合を大腿骨頸部骨折といいます。この場合、手術で骨を接合することは難しいため、股関節の一部を金属性の人工関節に取り換える置換術が用いられます。

従来、この手術は股関節の後方から筋肉を切って人工関節を挿し入れる方法が一般的でしたが、一度切った筋肉は弱くなるため、術後に股関節が脱臼する危険性があることが問題でした。しかし、近年では、股関節の前方すなわちズボンのポケットに手を入れるような方向から筋肉を切らずに挿入する方法が術後の負担も少なく、注目されています。当院の医師はそうした方法に習熟し、人工骨頭置換術の全てで採用しています。

万一骨折してしまった場合、少しでも早く適切な治療を受けることが普段の生活を取り戻すために最も重要ですので、お気軽にご相談ください。